

第7回 生駒市景観形成基本計画策定懇話会 会議録

1. 日時 平成24年8月3日（金） 14時30分～
2. 場所 生駒市役所 401・402 会議室
3. 参加者 久座長、下村氏、嘉名氏、大原氏、大西氏
4. 欠席者 樽井氏、福本氏、植田氏
5. 事務局 吉岡部長、中井課長、西本課長補佐、高谷係長、
塩崎主任、阪本主任、浅井（以上、みどり景観課）
坂井、絹原、依藤（株式会社地域計画建築研究所）
6. 会議公開 公開
7. 傍聴者数 2名
8. 生駒市景観形成基本計画策定懇話会開催要綱について

事務局説明（参考資料）

9. 議事内容

(1) 生駒の景観形成のキーワード（パターン）について

座長：本日の話題は、おおむね3つである。1つ目は、資料1の特に3章から4章辺りの構成を変更していただいているので、その全体の枠組の話。2つ目は、資料2の3章のキーワードと書かれているところ。3つめ目は、4章は次回用意していただくが、4章の中でこういう視点が必要とか、こういう内容でいいのかということの意見があればいただきたい。

まず資料1で構成が変わったが、全体像を見て、ここでのご意見、ご質問はどうか。また、資料2の中で、どのような観点でも何かご意見ご質問はあるか。

ユニークな計画作りに挑戦しているので、多分事務局も頭をひねって悩んでいるところもあると思うが、まずは、分かりやすすくないといけない。分かりにくいということでも率直に言っていただければ、また、この辺りどうなっているのかということでも何かあればお願いしたい。

私の方からは、12、13 ページのところで「ミチにあわせた境界」と書いているが、特に 13 ページをどう展開するか。必ずしも境界をどう作るかという感じではないような気がしている。13 ページに書いてあることは、ミチとイエの関係ということで、この場合境界という言葉づかいがいいのか。ミチとイエの関係とした方が内容が適切なのではないか。その辺りは書いた方に質問を兼ねてもう少し情報を提供いただきたい。

事務局：元々はいくつかのものを少し総合した形にしてあり、12 ページ一番上の集落についてはミチとイエという境界部のゆるやかな関係ということが要素としてあり、住宅地のところでは生け垣、オープン外構ということで境界なのかと思っている。商店街のところは場所としては境界ということで、その辺りをテーマにしたパターンということでまとめて境界としている。確かに 13 ページに書いているような展開の方策をみると、境界だけではないようなことも書いている。ご指摘のとおり境界というよりも「敷き際」、「建物の道路に面するところ」についての展開になっているので、タイトルが苦しい気がする。

座長：いわゆる道路と敷地の関係、あるいは場所としての敷き際のデザインということだと思う。境界という言葉には、敷き際という意味の他にも村の結界という意味もあり、他にもいくつかの意味がある。境界といわれたときに、敷き際がすぐにイメージが出来るかが疑問。キーワードを見ただけで意味が分かる方がいい。もう少し検討が必要かと思う。

参加者：誰に向けたものかが分かりにくい。役所向けのようでもあり、市民向けのようでもあり、あるいは、開発業者向けのようでもある。全般的には専門家向けっぽい印象がある。

パターンランゲージのイメージでいうと、「一戸一戸の佇まいというものをもっとしっかり考えましょう」といったこと。例えばお庭にきれいな花が植わっているという意識のようなものであるとか、世田谷区では地域風景資産というものを実施しているが、地域文化的価値としていいものではないが地域の人大切に思っているようなものがあって、そういうものを発見して大事にしましょうなど。やや歴史や文化とかに重点が置かれていて、もう少し日常の生活の部分が、本来はもっとあっていいのかなと思う。

それから、現実に生駒市がこれから抱えるであろう景観の課題、景観の問題点を念頭に置いた方がいいのではという気がしている。例えば、調整区域でのミニ開発、地区計画を使ったような開発、商店街で賑わいがなくなったときにどうしていくのかなど。そういうときに、この基本計画を実用的に使うのはなかなかイメージしにくい。それは別のガイドライン的なものに預けるのか。何が大切なのかは理解できるが、何かまちで景観をよくしようとしたときに実用的に使うのはイメージしにくい。

事務局：ご指摘いただいた誰に向けてかという話だが、市民に興味を持っていただくということで考えている。これについては、景観というのがそもそも専門的で、市民に理解してもらえるのは具体的なことになると思われるため、市民に景観を理解しても

らう啓発活動、景観に興味を持っていただくということで考えている。

また、個々のデザインのことだが、デザインマニュアルを以前作っており、これを今回の基本計画に合わせて次年度以降改訂していきたいと考えている。基本計画の中で、今回 11 のパターンに絞りこんだが、それらをどこまで書くべきかで悩んでいるところであり、今いただいた意見を踏まえてもう少し検討していく。

参加者：書き方だと思うが、例えば資料の 15 ページに、人々に関われる余地を残しておくことや、初めから作り込みすぎないこと、などの記載があるが、書き方が専門的だと思う。行政の担当者、設計者向けなら分かるが、市民からするとちょっと上から目線に感じる。市民向けだとすれば、言い方が変わってくると思う。

座長：体言止めのためきつく感じるのかも知れない。「しましょう」だとニュアンスが柔らかくなる。

参加者の話を聞いていると、この基本計画を読んで計画の方向性とかデザインが分かるかということだと思う。家を建てよう、開発しようという方が、これを読んでなるほど、こうしようというのがストレートに分かるかどうか。それはマニュアルに任せてしまおうというのであれば、その使い分けをどうするのかという議論、共有が必要。生活景に関しては、確かに生駒の景観の特性の読み取りはしっかりされているが、それ以外に、こういうことを配慮しましょうというレベルの話があるのかいないのか。また、過去から現在を読み取るというのは分かるが逆に、将来の課題から現在に引き戻してきたときに、現在どういう注意をしておくべきか、も重要だと思う。

事務局：生活景については議論しており、入れた方がいいという話もあった。とりあえず、今回は生駒らしい景観について絞りこんだもので、これだけを守ったらいい景観になるというつもりではない。網羅的な要素を基本計画に入れるかどうか、事務局としても悩んでいるところである。

参加者：私の感想だが、自分には関係ない、理解できるが日々の生活と景観というのは日常的な生活の中であまり関係ない、という感じで取られるような不安がある。例えば、色んなところで問題になっているが、住宅地に空家があって放っておかれている。住む住まないは個人の自由だが、きれいに保つというのはまちに対するエチケットとしてしっかりやっていただきたい。そういうことが景観にとって大切。確かに生駒ならではののではないが、もう少し市民の身近に感じられることを盛り込む方がいい。

参加者：市民向け、業者向け、行政向けなのかという質問があったが、私の感想だが、現行計画と比べて、今回のものはかなり専門的な言葉があった。神奈川県条例の原則でも、尺度などの文言が使われている。私は、学術的に非常にレベルの高いものだと感じている。もう少し市民に分かりやすい形にしていきたい。

座長：分かりやすさに関して、参加者の話に関わるが、右側のページに書かれていることが、もう少し事例も含めてこういうようなことですよという分かりやすい写真、図であった方がいいのかと思う。抽象度が高いところで止まっているものが多い。書きぶりが

同じでも、分かりやすさを落としていくといいのでは。

また、敷地レベルのデザインの話がどれだけ出ているかという点、まだ十分ではない。例えば 19 ページのところを一軒一軒でやろうと思うと、街区デザインの中でポイントとなる交差点部分のデザインの話なので、難しい。敷地レベルでなくて街区レベルのデザインの話である。そういう目で見えていくと、案外敷地と書いてある内容でも、まだ敷地レベルの話に落とし込めていないということもある。もう少し敷地レベルの話を増やしていく必要がある。

参加者：13 ページのところで、ファサードのデザインの絵がある。下から二つ目の○のところで、建物のデザインの問題を指摘されている。これは、道との関係、境界ではなく、建物と外との交流、関係性であって、あくまで建物のデザインの問題に入ってくるのではないか。

座長：敷地の中に建っている建物なので、敷地として扱えると思う。これも写真がない。これは、結局は道を歩いている人に対して、賑わい、楽しさを表現しましょうという話。もう少し分かりやすく表現できないかという気がする。内と外の関係が、道を歩いている人では逆になって、路面と壁で部屋みたいな空間が構成される。それを英語ではアーバンルームというが、壁が楽しくないと、空間が楽しくない。賑わいの空間、商店街などでは、道の両側の建物から賑わいが醸し出されていないと楽しくない。人を集めている商店街では、中から外が見えるようになっている。完全に閉じられているような壁で開口部が無いという商店街では、何か賑わいが寂しい。だから人が寄付かない。それを表現しているはずだが、文章だけでそれがストレートに読めるかどうか。図、写真も無いので、言っていることが伝わるか不安。

また、13 ページの一番上の「集落内では」というところ。集落のデザインはしないので、湾曲した道路の場合は景観の変化を付けていきたいと思いますということ。ここからいくつかのデザインが引き出せる。道を直線ではなくて湾曲させたり、変化を付ける道路パターンの話も含まれている。また、一つ一つの建物の外観のデザインを変化させることで連続性とか面白さを出していきたいと思いますという両方を含んでいる。

先程から言っているように、これは一体どういうことなのかという事例の写真やデザインに落とした具体的な話をしていくと分かりやすさがアップする。参加者のセミパブリックの話は、12 ページの真ん中の写真の2つを見ていただいたらよく分かる。生け垣にすると緑は増えるが、道路と敷地の関係を切ってしまう。プライバシーは高まるが、家と道の関係を切ってしまう。オープン外構にすると、この辺りの繋がりが連続感をもって見える。これがセミパブリック、セミプライベート。これは、空間的に道路と敷地を繋いでいる。だが、生け垣の緑を増やすことは、それで視線的には切れてしまうが、緑によってセミパブリックな空間を構成しているという読み方もでき、色々な解釈が出来る。そこを解説しておかないと、専門家以外には分からない。

参加者：ガイドラインで書く内容がここに含まれている気がする。例えば、山手になった

道路があったときに、両サイドが人工物であるよりも、フレームに切り取ってくるのは自然物の方がいいというそんな表現があってもいい。考え方なのか、ガイドラインかという、ひょっとしたらガイドラインに近い話を書いているのではという気がしている。

また、生駒の特性として凹型地形の特性を生かした見上げる景観というのがある。専門的になるが、コンケイブというキーワードは重要。谷地形という意味。これをなんとか生かせないか。フレームのところで借景と書いたが、コンケイブになっていて、凹凸の凹になっているため、生駒山や矢田丘陵が見えて建物が隠れて見えなくするような工夫が出来ないか、とか。

重畳景観とういうのは、折り畳むようにどんどん奥に広がっていく山並み等を意味する。背景に矢田丘陵があって、その前にある森や山がぼこぼこ出てくる中に都市が見え隠れする。その景観を作り出すために、前の方に緑を盛り込むとか。

人が交わるという話では、外部デザインについて、敷地の塀越しに樹木が見えることが多い。道が曲がっている場合はコーナー部分にシンボルがあれば、そういう風景は地域の景観としては馴染んでいる風景に感じる。そういうものを資源的に生かせないか。

これは、ここで議論することではなくて、ガイドライン的なところでこうやってどうですかということかも知れない。資料2には両方に入っているのではという印象が強い。生駒固有のガイドラインとして、生駒固有のものを詳しく説明して、読む人に分かってもらおうと思う場合、生駒固有のものを言い過ぎない方が分かりやすい気がする。“玄関のところにはシンボルの木を植えてね”というところまで書くのか。大きな地形構造をどう考えていくかということを一一般の方が全部分かるのではなくて、これを勉強していかないといけないのではと思わせる程度のレベルで書くのか。このバランスが難しい。

修景する方法について、こと細かく書いていく。これを書きすぎるとガイドラインのマニュアル的になる。その辺りが迷いどころ。具体的に書きすぎると考え方の計画ではなくなるような気がする。ここで書き過ぎたことは、ガイドラインで受けてどう表現していくか。ここに載っていない一般論的修景景観の方法まで書いていくのか。その辺りを整理する必要があると思っている。景観的によく使われるキーワードというのはこのレベルでは入れておく方がいいのでは、とは思う。

座長：コンケイブという話は、3章の1の1の地勢の所に盛り込めると思う。あるいは、後の話を上手く盛り込めば、見開きの右側のところで盛り込める気がする。例えば、5ページは生駒山に限らず矢田丘陵等も含めて後ろに山があるときに、どのようにデザインしましょうという話になっている。先程の重畳景観、切り取りフレームの話はここに入れられる。だから、全部入ってくるのではないかと思う。

参加者：座長がおっしゃるように、地勢のところの冒頭のところに入れておいて、全部使いながら表現できるようなキーワードだと思う。

人と交わるというのは、特に、農村集落とか道が曲がっている場合と道が直線の場合

で、修景デザインの方法が若干異なる。道が曲がっているところは、曲がっているところにどうアイストップを置くかでだいぶ風景が変わる。直線道路の場合は、ずっと生け垣で繋がなくても、緑を点在させるだけで連続感を出すとか、書き出すと色々出てきそうな気がする。これはいらないのじゃないか、ここはもっと充足した方がいいとか、取捨選択していただくのも一つかなと思う。

また、私も、座長がおっしゃるように写真を入れて、横にスケッチを描くか、写真の説明を加えた方がいいと思う。そういう写真を見つけるのが難しいが。

この基本計画の使い方はどうなのか。市民の方々がマニュアル的に使うという他にも、景観を作っていく専門家、建築家や造園関係にも使っていただきたい。生駒はこういうことをやっていますという指導書的なところに私は位置付けたいと思う。ガイドラインというか、マニュアルなどがあるのであれば、それは微妙だが。ガイドラインの中身は、こういうふうに修景していきましょうとか、そういう感じになっている。この基本計画の方は、一般に「こういう考え方が景観に大切ですね」というのが、あるべき姿だと思う。「生駒の景観の」という形容詞がついているので、少し迷うところ。

参加者：もう一つ基本原則のところ、生駒市は全域が景観形成地域で、その中で農地もずいぶん残っている。そういうところは、基本原則の中に入れるのは難しいのか。農地は景観上非常に重要な位置をもっている。

参加者：農地で問題になるのは、都市計画の道路を決めたときに、道路から 25m 区域に建物が建っていく。すると、肝心の道路から農地が見えなくなる。それを景観の方から誘導できるかという、なかなか難しい。例えば建物を建てる時には、できるだけスリット、間をあけて奥が見えるようにと書くか。そうしないと農地が見えない通りになって、あんこ型の農地が残ってしまう。都市計画の方ではそれはいいということになるが、景観上配慮をどう求めていくか。奥が見えないようにしない、全部隠さないようにするのは必要だと思う。それが歴史・文化、市街地と境界のどこの場所に入れるかは検討しないといけない。

座長：そろそろ全体を見通して話をしたい。今回 3 章の 2 だけ示していただいているが、2 章 3 章全部通して見たときに、何がどこに書いてあるか、どこに収められるか。先程の田園の話は、基本原則の 3 番の「くらしの営み」とも関係するのかなと思う。あとは、建築デザインの話に頭がいつているが、都市計画とか土地利用を縛る書きぶりも意識しておかないといけない。景観を守るために土地利用を誘導するというのも必要。

ちょっと絵を見て気になったが、5 ページの絵の山はどここの山なのか。生駒山だとすると 3 ページと重なってしまう。ぐっと立ち上がった生駒山より、もう少しなだらかなで低い山の緑の方が適切ではないか。南生駒辺りではもう少し低い山を背景として、集落が成り立つので、それをこの 5 ページでは書かないといけない。

他に、事務局から聞いておきたいことはあるか。

事務局：マニュアルもこの後作る計画であるが、そうすると基本計画のキーワードをどこ

まで右側のページで書くのかというのが悩みである。書くには書けるが、書きすぎるとマニュアルそのものになってしまう。基本計画の第3章は、通常の基本計画では景観形成の方針に該当するものであるので、キーワードのパターンの説明も景観形成の方針のレベルで止めた方がいいのかと思うが、そうするとパターン自体の中身が分かりにくい。その辺りで悩んでいる。

座長：一つ一つの文章にするという訳ではなくて、一つ一つの事例や写真の中で組み込んで、大きくくくる2行の言葉があったらいい。それを、こういう場合はこうしなさいなど、ブレイクダウンするのがマニュアル。

事務局：今の構成でいくと、右側のページに大きいパターンがあって、その下に、いくつか具体的なスケッチや写真を並べればよいのか。

座長：その方が分かりやすくなる。例えば15ページ。「余地を残しておく」は、専門家が使うオープンエンディッドデザインを意識しているのだと思うが、そのところに「住民が関与できる空間を確保」の文言がある。ここの絵は何がいいのか分らない。住民が積極的に関与してデザインが完成する、ということだと思うが、それであればもう少し分かりやすくした方がいい。

参加者：ガイドラインに近い内容が多分に含まれている気がするが、もう少し原則の骨太な話だけでいいのではないか。実際にどうするかは、ガイドラインに展開するのならその意味とか、重要性という事をしっかり理解していただく。

参加者：参考文献として、「イラストによる都市計画のまとめ方」という書籍を紹介したい。ここにたくさん掲載されているので、これを使いながら、応用展開すれば良いのでは。

参加者：ベーシックな部分は、基本的にどの都市でも大きく変わらない。例えば東京では崖線の景観という。生駒だと当然勾配も違うし、傾斜角も違う。その事を重畳景観と呼ぶのか、何と呼ぶかだと思う。いずれにしてもその言葉は大事である。

座長：奈良でいうと、「たたなづく青垣」というのがある。これも重畳景観。大和言葉で「うるわし」とか。

12ページ、13ページはたくさん書かれている。たくさん書いてある箇所は2つ以上に分けられるのではないか。

参加者：感覚的にはもう少しキーワードが多い方がいいのではないかと思う。先程、生活景等と言ったのは、キーワードを増やしやすそうだからである。

座長：生活景を入れるとすれば、本当に大原則でいいのではないか。周りとの関係を考えてみましょう、など。

事務局：基本的な大原則の話だけを入れる。その後、マニュアルを作る段階で、新たにパターンを見つける等で追加するプロセスにする。

参加者：この資料が充実され、デザインのキーワードが紹介されており、出典がちゃんと書かれれば、売れるのではないかと思っている。こういうことは、あまり事例がない。限定的な分野かも知れないが、学生には良いだろう。他の市町村にも参考事例になると

思う。

参加者：生駒駅前北口再開発地区の建築中のマンションは、9、15 ページの内容を踏まえて問題はないのか。間に道を挟むとつながり等も。

参加者：まちづくり相談で図面等を見ましたが、周辺の建物と色やファザードが配慮されている案でした。見通せるところもありましたので、大きく問題はないと思います。

座長：生活景レベルの話でいうと、川越の一番街のまちづくり規範が非常に分かりやすい。

「高さは周りを見て決める」や、周辺配慮を意図する「4間・4間・4間のルール」などがある。

参加者：内容についてどこまで書き込むか。質は落とさず、考え方を示した方が良い。市民が見たときに「考えないといけないよ」から「こんなん知ってるわ」まで幅を持たせることが必要。「理解できないけど、これも景観なんだ」「こういう事を考えないといけないのではないか」という事に気付いてもらうことも重要。

参加者：しっかりと作り込まれたデザインに対してリスペクトする事が大切。「緑がきれい、建物がきれい」が当たり前な感覚というのはとんでもない。誰かががんばっているからある。だから自分も何か貢献する、それが原則。川越は、67 個のキーワードがあった気がする。数はこだわらないが、もう少しあった方がいい。

座長：川越は作法レベルの話も入っている。「らしさ」をどう生かすか、のみでなく、心構えや精神の話も入っている。心構えの話が、3の3に入ってもいいかも知れない。「周りに配慮しろ」、「独りよがりのデザインをせずに」など。

参加者：いろいろキーワードは、増やせると思う。坂道とか。

事務局：坂道も考えたが、坂道と建物をどのようにデザインしていくのか。生駒市に合うパターンが分からなかった。今回、よう壁の高さを“人の尺度”に入れた。生駒には、名前の付いている坂道がない。坂道という意識がないのでは。

参加者：地形勾配に応じて、妻を見せるのか平を見せるのかでイメージが変わる。つなぎ目は隠すために植栽するといいいのでは。13 ページの住宅地内の図は、みどりや花などで潤いを演出と書かれているが、“つなぎ目は植栽等で修景すると連続感が増します”の方がいいのでは。みどりや花などで潤いを演出はベタすぎるので、もう少し踏み込んだ方がいいと思う。

座長：16 ページの集落とミチの関係は、どこかをイメージされているのか。

事務局：藤尾町辺りです。

座長：生駒の街は、谷筋にある。断面図だと川、田んぼ、集落、背景に山がある。平面図では山、道路、田んぼ、川という構成になっているのではないかと。大きく見たときにこうなっているという、大きな構成はどこかに書かれるのか。里山集落と川との関係がどうなっているかなど。坂だらけといたが、谷と平行に集落の道があるとすれば、それは坂でない。それぞれの家に入る道は坂。集落と家の構造を見たら、生駒の景観らしさが見えてくるのでは。今いるこの辺りは坂が多いが、この辺りは生駒山の登り口の裾。

そういうことが分かる可他にも色々分かるのでは。

参加者：集落の上の方に神社仏閣がある。どこかの図面で読み取っていたと思う。本当はそこから上は開発してはダメなところで、元々は結界であった。今はそうではなくなり、上まで集落がある。高台には神様がいて見下ろしていたのではないか。水害等あればそこまで登っていたのかも知れない。

座長：2章の2のところ、道と坂の関係。2章のところに集落と山、田んぼ、川の関係は書かれている。ただ、「それが道の勾配にどう繋がっているか」まで落とさなければいけない。構造だけが分かっても、「それで」となってしまうので、もう少し深く読んでいかないといけないというのが2章の2の箇所にあるのかと思う。

例えば、市役所に来る人は多い。断面で切ったときに、市役所はどこにあるか。それが分かれば、「市役所は斜面の始まりだからどこから行っても坂ばかり」というのが実感を持って分かるのでは。

最後に4章についてはどうか。今は市民の立場で書かれているが、立場によって意識して書き分ける必要があるのでは。事業者といっても色々な事業者がいる。例えば、農家の方は市民か。最近ではNPOも重要になってきている。個人の市民、市民グループとしての市民の動き方は違う。

参加者：土地利用が気になる。土地利用別、3つに分けた景観別、スケール感、担い手別。山手、田園、都市をパターンで組み合わせると軸が多いので表には収めにくい、必要だと思う。市民、事業者、行政。市民も事業者も何列かに分かれて縦列ができるとしたら、横軸は土地利用ではないか。それを囲む丸がスケール感ではないか。横軸にスケール、土地利用ごとに丸で囲むというのものもある。どこかでグループを作りたい。パターンが出てくる母体は何処か。市民、事業者、行政の方。「市民の方が大景観に関連して田園地域でやる場合はこのパターン」のような組み合わせはあるかも知れない。その場合土地利用が横に来て、スケール感がアメーバ状で表せるのではないか。

座長：節がもう一つあるのかということか。市民と行政の協働の話になってくると、「景観イベント」のような楽しい試みがあったら良い。勉強や規制という感じよりも、楽しいまちづくりのスタンスができれば。

参加者：4章のところで、以前箕面市の基本計画の話聞いたが、そのような市民会議のイメージはないか。

事務局：デザインマニュアルの充実のために、市民の意見をワークショップ形式で集めていく方策や、建築家など景観に関係する人たちと意見交換したいとは考えている。現時点でまだ具体的な事は未検討である。

座長：郡山市では、20-30代がネットワークを作っている。大金魚博覧会を行った際は、金魚のアートや公募を募っての展示、軒先に金魚のモニュメントを展示していた。子どもを集めて何千匹と作成するなど。これらはNPOが実践している。

参加者：私もそういうことを考えているが、地元ではキーパーソンが誰なのかが掴めない。

地元の中でやる気になる人が見つからないと難しいのではないかと考える。

座長：最近では20代の子が元気。その子に触発されて大人がやる気になっている。電話ボックスで金魚の水族館をやっていたのは大学生。埃だらけの遊郭の建物を使ったイベントの際は、掃除自体をイベントにしていた。そういうことをやっていると、色々と声をかけてもらえる。トントン拍子に動いたケースであった。こういうのは典型的なパターン。堅苦しく考えなくても、若手が面白く展開してくれる。市役所は手を貸していない。むしろ市役所が乗せてもらっている。4章はそんな感じになれば良い。

参加者：ガイドラインが別にあるのであれば、テクニカルな話よりは新しいパートナーシップの形などを書いていただければよい。

参加者：ワークショップの計画は、これができた後にやるのか。ここに書き込むものか。

事務局：現在考えているところで、基本計画なので具体的に書くことはないと思う。例えば、こんなやり方、こんな形にしたい、のような記載を考えている。

9 その他

(1) 生駒の景観募集について

事務局：生駒の風景や暮らしの写真募集の活動は4名で行っている。募集方法は2通り。

1つ目のチラシは7月初めに市内の全小学校に配布。子どもたち目線で印象に残った生駒の風景から生駒らしさを知る事で、残すべきものが見えてくるのではと考えている。校長先生にお願いし、高学年の夏休み、冬休みの宿題となった。来年景観シンポジウムにて、集まった写真を取り上げる予定。もう1つは一般向け。生駒の中で目に映るもの全てを対象として、生駒の良いところを広く集める事を希望している。今後、HP等で宣伝活動も行う予定である。

(2) 今後のスケジュール

事務局：懇話会年末までに3回、パブリックコメント後の年明け1回、計4回開催予定である。次回第8回で、基本計画の素案作成、意見交換を行う。第9回は11月初旬でいただいた意見をまとめ、12月に基本計画最終案をまとめる。懇話会で確認後、景観審議会に提出し、年末～1月にかけてパブリックコメントを実施。パブリックコメント収集後、2月に報告し最終案を確定する。

第8回の開催日程は9月頃を予定している。決まり次第ご連絡させていただく。

以上